

石見銀山遺跡

ニュース

Newsletter of the Iwami-Ginzan Silver Mine Site

FEBRUARY 2006 NO.10

平成18年2月10日発行 第10号

島根県・大田市教育委員会



>> Contents

page 2~4

- 世界遺産登録推薦書提出
全体の経過－推薦書の作成から提出まで－ 世界遺産登録推進室 鳥谷芳雄
● 推薦書作成のポイント 「本文作成」 比較の重視 世界遺産登録推進室 佐伯徳哉
「保存管理計画」 大田市 遠藤浩巳
「図面の作成」 世界遺産登録推進室 鳥谷芳雄
「写真(スライド)・ビデオの作成」 世界遺産登録推進室 佐伯徳哉
- 5 総合調査から 発掘調査 大田市 中田健一 文献調査 島根大学法文学部 小林准士
科学調査 世界遺産登録推進室 足立克己
- 8 世界遺産 先行事例 山間の鉱山都市 バンスカ・シュティアヴニツァ(スロバキア)
－東欧革命の変革の中で－ 世界遺産登録推進室 佐伯徳哉
- 9 整備・活用から 石見銀山協働会議 第3回全体会 開催 大田市 竹下健
重要文化財熊谷家住宅 大田市 林泰州
- 11 整備事業から 町並みを歩く⑨ ～修理の現場から～
大森銀山地区 大田市 三谷岳史
温泉津地区 大田市 今田善寿
- 12 石見銀山遺跡調査活動日誌抄

〔石見銀山遺跡とその文化的景観〕
世界遺産登録推薦書

世界遺産登録推薦書提出



▲文化庁長官河合隼雄氏サイン

全体の経過 — 推薦書の作成から提出まで — 世界遺産登録推進室 鳥谷 芳雄

文化庁から推薦書の素案作成を委ねられた県が、旧1市2町と共同しながらこれに本格的に取り組んだのは2003年からのこと。まもなく世界遺産に精通した人を中心とした学術的な専門委員会も設けられました。もちろんこの時点からすべてが始まった訳ではありません。1996年以来継続して行ってきた総合調査の成果が、素案作成のベースとなっていたことは言うまでもありません。

しかし、そうした中であってもお新たな調査や検討を加えなければなりません。昨今の世界遺産登録の流れから、諸外国における類似資産との比較研究、文化的景観の観点からの価値評価、さらにはより確かな保存管理計画の提示を求められたからです。そのため、04年末から05年初めにかけては、海外5カ国で資産の比較調査を実施しました。また、世界遺産への理解を深めたり鉱山遺跡に関する国際的評価を得る目的で、03年から国際シンポジウムや専門家国際会議などを開催し、保存管理の問題をも含めて議論・聴講を行いました。

本文や図面等の地元素案がまとまり、文化庁へ提出したのは昨年7月末。その後、記念物課本中眞主任調査官の熱のこもった指導のもとで原案が出来上が

り、05年2月改正の「世界遺産登録のための作業指針」に基づいて、9月末には暫定版が国からユネスコの世界遺産センターに提出されました。これを受け取った同センターは11月、内容に関わる若干の指摘を伝えてきましたが、この課題にも対応して暮れの12月27日文化庁長官の署名が入り、翌日正式な推薦書の送付、年明けて1月4日に受理されました。

わが国から提出した推薦資産の名称は「The Iwami Ginzan Silver Mine and its Cultural Landscape (石見銀山遺跡とその文化的景観)」です。推薦書は本文、参考資料、参考図面、写真、スライド、ビデオから成り、6冊のファイルと1巻のロール図面にまとめられています。それぞれの内容や作成ポイントは以下に記すとおりですが、推薦書には石見銀山遺跡の世界遺産としての「顕著な普遍的価値」と「保存管理計画」が明確に示せたのではないかと思います。

あとはイコモス及び世界遺産委員会の審査結果を待つだけです。ここに至るまで専門委員会の方々をはじめ、文化庁や英訳等の作業をお願いした(株)プレック研究所、さらには多くの方々のご指導、ご支援、ご協力をいただきました。ここにすべての関係者の方々から心からお礼を申し上げます。

推薦書作成のポイント

「本文作成」比較の重視 世界遺産登録推進室 佐伯 徳哉

2004年6月にその年の世界遺産を決めるため中国蘇州において開催されたユネスコの世界遺産委員会では、世界遺産に推薦する資産と、ほかの類似した資産との比較研究がきちんとおこなわれているかが重視されました。

このことは、早速、この委員会に出席した文化庁の本中主任調査官から島根県側へ伝えられ、すでに世界遺産になっている世界中の鉱山関連（鉱山やその付随都市など）の類似資産を中心に石見銀山との比較検討を行うようにとの指導がありました。

世界遺産にしようとする以上、まずは国内的評価は大前提なのですが、さらに国際舞台で通用する「他にない固有の価値」を訴え、対外的に認めさせなければならないということで、既に推薦書作成委員会の委員の皆様方のご意見・御指導をいただきながら作業を練っていました。

しかし、ここで、先行する個別事例に則して比較の結果をだす作業が要求された訳です。

そこで、事務局では先行するいくつかの鉱山関連の資産が世界遺産に推薦された際の比較研究の状況について確認してみました。少なくともユネスコのホームページに掲載されている世界遺産一覧から、推薦された資産を調査したICOMOS（国際記念物遺跡会議）がユネスコ世界遺産委員会に世界遺産としての可否を報告した評価書を詳細に見ると以下のとおりでした。

まず、1990年代に世界遺産になったドイツのランメルスベルク鉱山と古都ゴスラー、スロバキアのバンスカシュティアヴニツァの推薦では、比較研究は「実施中」のまま登録が行われていました。しかし、2000年代に登録が行われたファルンの大銅山（スウェーデン）あたりから、先行して世界遺産となった複数の鉱山との比較研究結果が簡略ながら網羅的に出されるようになりました。そして、2004年の委員会で明確かつ厳密に比較研究の結論を出すことが要求されたのでした。案の定、2005年2月にユネスコから出された世界遺産推薦書作成のための新しいガイドラインにもこのことが明記された訳です。

このように、世界遺産推薦手続の条件は、常に動いていました。

そこで、事務局では先方の要求をかなり先を見越して想定しなければ対応不能になると考えました。他所の推薦書がどのような資産の実態に即してどのような書き方をしているのかさらに突っ込んだ分析作業が必要と考えました。換言すれば、どうすれば

石見銀山遺跡の特徴が効果的に訴えられるのかということ。

それ以降、これに対応するために複数箇所の現地調査を交えて奔走したわけですが。その結果、先行する鉱山関係世界遺産で石見銀山とほぼ同時代のものと比較した結果、概ね以下のようなことがわかりました。

1. 資産の内容（多様な構成要素）

ヨーロッパ6カ所・中南米4カ所の鉱山関係の世界遺産のタイプと比較すると以下のとおり。

80年代の登録では、鉱山の発達によって繁栄した都市2カ所（ノルウェーのレロス、ボリビアのポトシ市街）、鉱山と都市のセット1カ所（メキシコのグアナファト）。90年代の登録では、鉱山のみ1カ所（スペインのラス・メドラス）、都市のみ2カ所（メキシコのサカテカス、チェコのクトナ・ホラ）、鉱山と都市のセット2カ所（ドイツのランメルスベルク・ゴスラー、スロバキアのバンスカ・シュティアヴニツァ）。2000年代に入ると都市のみ1カ所（ブラジルのゴイアスの歴史地区）、鉱山・都市・交通路のセット1カ所（スウェーデンのファールン）。

これに対して石見銀山は、鉱山・町並・街道に加え港湾など生産・輸送・支配・信仰に至る資産がセットで残っている。

2. 時代性（近代化より前）

ヨーロッパの金銀銅鉱山では、水力動力から蒸気機関が発達する、いわゆる「近代化」の施設が殆どを占める。石見銀山では小規模・手工業的生産に特徴づけられた近代以前の生産方法で大量の銀生産を達成した跡が多く残されていること。

3. 燃料供給源としての森林（豊かな緑）

中南米の鉱山では、森林資源が枯渇してしまっているが、中部ヨーロッパの鉱山や石見銀山では森林管理も相俟って今日まで豊かな緑が残されている。

4. 世界史的意義（文明の交流を生み出した）

石見銀山や中南米の銀鉱山の銀が歴史に与えた直接的影響は文明を超えた世界史的な拡がりを持つが、ヨーロッパの金銀鉱山の多くは国内もしくは概ねヨーロッパ文明内に限られる。

「保存管理計画」大田市 遠藤 浩巳

世界遺産登録推薦書のうち、資産が将来にわたってどのように保護されるのかを記したものが保存管理計画（マネジメントプラン）になります。

石見銀山遺跡の面積はコアゾーンは約442ヘクタール、バッファゾーンが約3,663ヘクタールと広大であり、多様な遺跡群の集合体であると共に、これらが有機的に関連しあう複合性という特徴を有しています。保存管理計画ではこれらの資産の構成要素及びその価値を明らかにし、今後の適正な保存管理の施策と体制整備のあり方を示しています。

また石見銀山遺跡には14の構成資産があり、史跡・重伝建地区・重要文化財という3つの文化財の種別にわかれること、さらには種別ごとに保存管理計画が定められていることから、保存管理計画相互の調整のために「包括的保存管理計画」を策定し、資産の全体を統括的に保存管理に当たることとし、推薦書に添付しています。資産のバッファゾーンを成す景観保全地域については、大田市が制定した「石見銀山景観保全条例」により景観保全を図ることとしています。

保存管理における基本方針は「地域住民の生活及び生業活動の維持と、遺跡や周辺景観の保存保全のための規制と、整備活用等との調和のとれたものとする必要がある」という前提の下に、6点にわた

「図面の作成」世界遺産登録推進室 鳥谷 芳雄

図面類は、位置図、法的保護区分図、関連法令区分図、資産構成要素図、資産目録、指定官報告示の写し、歴史年表、調査修理年表、消防防災施設や公開活用施設の設置状況と公開ゾーンの範囲図、関連法令一覧、既に計画段階にある開発予定図など、全部で12シリーズ76枚で構成されています。

このうち資産構成要素図は、石見銀山の3分野14構成資産を表した詳細図面であり、銀山柵内における鉱床

「写真(スライド)・ビデオの作成」世界遺産登録推進室 佐伯 徳哉

スライドやビデオは、2007年に開催されるユネスコの世界遺産委員会において上映されるものです。

撮影のために撮影スタッフが町や山中を歩き廻りましたが、航空機による空撮などでもお騒がせしましたが、地域の皆様の御協力を頂戴することができ、関係者一同、心より感謝申し上げます。

これらの作成は、直接的にはカメラマンの井上治夫氏、プレック研究所の皆さん、TBSビジョンのディレクター・カメラマン、大田市立大森小学校の山岡校長先生をはじめ先生方、生徒の皆さん、地元森林組合の方々

と定めています。それらの中で主要な方針として 1) 指定地内に地域の人々の生活生業が行われていることに配慮し、住民生活と調和し住民意向を尊重した保存管理すること 2) 計画的、継続的に発掘調査等により遺跡の全容解明に努めるとともに、資産の構成要素を特定し本質的価値を明確に把握し、要素毎の適切な保存管理の方法を示すこと、を挙げています。

整備活用の具体的な実施計画については、個別の保存管理計画に基づき大田市が定めることとし、基本方針を 1) 遺跡等の状況把握と資料の蓄積 2) 均衡のとれた保存と整備活用 3) 遺跡等の整備と住民生活との調和 4) 遺跡の価値を理解し、歴史と文化に触れる場の創出 5) 資産、景観及び環境に配慮した観光施策、としています。このうち遺跡の整備活用については、地区区分を行い地区ごとの整備方針を定め整備活用を図るものとし、遺跡の全体像を理解するために、地区ごとの特性や均衡に配慮し、代表的かつ重点的な遺跡の整備を段階的に実施する方針です。

今後の保存管理の運営方法と体制整備については、行政機関がそれぞれの役割を強化し、相互に連携すると共に、地域住民等の活動への支援を継続・充実し、行政と地域住民等との連携を図っていくことにしています。

や採掘跡の分布図をはじめ、採掘跡と隣接する平坦地の配置状況図、代表的な精錬工房跡及び炉跡などの遺構図、大森銀山や温泉津地区における町並み配置図などから成っています。また、「石見銀山遺跡とその文化的景観」の理解を助ける意味で、その背景となる地勢や植生を表した自然環境図や、16世紀から19世紀に至るまでの石見銀山における産業システムの変遷を4段階に分けて表した模式図などが加えられています。

ほか県・市・旧2町の職員、総力をあげての撮影であったことを、申し述べておかなければならないでしょう。

ビデオもスライドもいわゆる資産の内容を表現すること、資産を保全してきた地域の皆様の日々の営みを理解してもらえるように作られたもので説明的なものです。緑豊かで草深い中にある遺跡や町並みで、資産をよくわかるように表現することに大変苦勞をしましたが、むしろ、そのことに自然と調和しながら生産し生活してきた日本人の歴史的営みが出ているともいえるでしょう。

総合調査から

(1)発掘調査 大田市 中田 健一

本谷地区には、石見銀山の最盛期に多量の銀を生産したといわれる本間歩、釜屋間歩などが位置しています。発掘調査は、現在この本谷地区を中心に進めています。

釜屋間歩周辺における今年度の調査は、釜屋間歩の北側に位置する「岩盤加工遺構」の上から2段目にある調査区を広げ、建物跡のより詳しい情報を得ること、併せて釜屋間歩の南東に位置する平坦面のトレンチを広げて、これまで検出されていた製錬遺構周辺の状況確認でした。



▲2段目調査状況

まず、「岩盤加工遺構」の2段目では、昨年引き続き建物柱穴が見つかり、他に溜桝状の遺構が溝を伴って検出されました。

溜桝状遺構は約50cm四方で深さ約30cmのもの、180cm×120cm程度で深さ約50cmのものが確認され、両者が幅約10cm、長さ約80cmの溝で繋がっていました。この溝には、小さい方の溜桝から大きい方の溜桝へ向けて勾配が付けられていて、小さい方の溜桝に水が一杯になると大きい方の溜桝へと流れ



▲溜桝状遺構

出る仕組みになっていたことがわかります。大きい方の溜桝に溜まった水も、水位によって暗渠を伝って排出される仕組みになっており、この平坦な場所では水を用いる作業が行なわれていたことが推定されました。

次に、製錬遺構周辺の調査では、建物の礎石が約1mの間隔で5つ並んで検出された他、製錬遺構や水を溜めた石組みの施設が確認されました。

今回検出されたこれらの遺構が、昨年までに確認されていた製錬遺構等を埋め立てて作られていた状況から、その年代の幅によって、この地点では1600年頃から1700年頃までの間、選鉱、製錬等の作業が行われていたとみられます。したがって、これまでに調査されてきた於紅ヶ谷地区や竹田地区の調査地点と比較すると、この調査地点の方が、やや長い期間にわたって銀生産が行われていたと推定されました。

他に、周辺の岩盤の上に堆積していた木の葉等を取り除き、遺構の顕在化を行いました。釜屋間歩では切り立った岩盤の表面に残された鑿跡がはっきり確認されるようになり、谷の反対側斜面でも江戸期とみられる間歩に伴う岩盤を掘削した跡が検出されました。



▲現地一般公開

釜屋間歩は文献史料ではよく知られていましたが、その現地がどうなっていたのか、以上述べてきたように発掘調査によりその一部分をうかがい知ることができました。

今年度は、このほか伝統的建造物群保存地区内で、建物の基礎構造や町並みの変遷を明らかにする目的で、トレンチによる確認調査をおこなっています。

(2) 文献調査 島根大学法文学部 小林 准士

大田市大森町の旧熊谷家住宅の修復保存工事が終わり、いよいよ今年4月からは一般公開が始まります。文献調査では、この熊谷家の古文書調査を、これまで14次にわたって進めてきました。

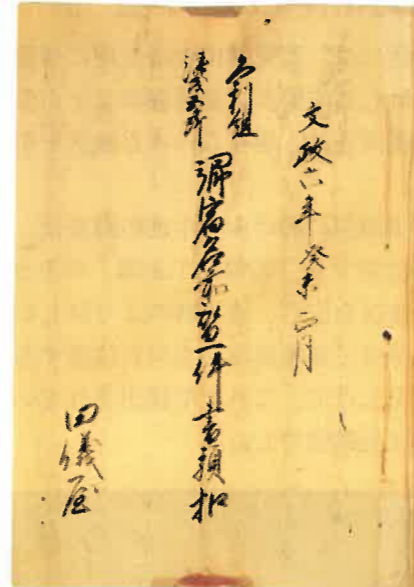
熊谷家に残る古文書は膨大で、調査はまだ継続中ですが、これまでの調査で全体の輪郭がおぼろげながら見えてきました。その内容は、石見銀山附幕府領（以下、銀山料とします）を治めた大森代官所に本来あったと想定できる古文書と、熊谷家の家職にかかわる古文書とに大別できます。

前者には、銀山料内の村々の宗門人別改め帳や、袋に入った訴訟関係の一件書類、代官鍋田三郎右衛門宛ての多数の書状などが含まれます。なぜこれら代官所の文書が熊谷家に伝来することになったのかはまだ分かりません。しかし、後述する熊谷家と代官所の密接な繋がりに由来することは間違いないでしょう。

特に袋に入った一件書類は数量も多く内容も豊富なため、今後の活用が期待されます。欠落(かけおち)人の報告、鉄などの商取引や金銭の貸借をめぐる紛争、寺院や神社に関する訴訟、博奕や盗みなどの犯罪の審議記録、離婚訴訟など、内容は多岐にわたっていて、しかも銀山料内の多く地域の事例が存在します。したがって、熊谷家文書を手がかりにして、関係地域に残る史料の探索を進めていけば、多くの事柄が今後明らかになるでしょう。

一方、熊谷家の家職にかかわる古文書は、掛屋・用達・郷宿といった御用請負人としての活動や、町役人としての職務遂行にあたって作成された史料が中心になります。御用請負人とは、大森代官所の支配にかかわる業務を請け負い、その遂行を通じて、領内の百姓・町人から金銭収入を得た人々のことを言います。このうち掛屋は熊谷家の中心的な職掌で、銀山料内の村々からの上納銀を天秤秤で規定の重量があるかどうかを確かめる仕事でした。また用達は、代官所の建物の修復や、道具・備品等の納入を手配する仕事でした。そして、郷宿は領内の村々の百姓が代官所に用事があり大森町に泊まる際の宿でした。近世中期以降、銀山料の村々は六組に分かれていましたが、このうち熊谷家は久利組と津和野方面にある銀山料の飛び地の村々の宿でした。

熊谷家は掛屋をしていた関係で、公金を代官所から預かったり、運用したりする仕事に携わっていま



▲上田儀屋が郷宿を務めることになった際の文書

した。注目されるのは、大森代官所内の銀山方役所の資金も預かり管理していた点で、関係する文書が多数残っています。また、近世後期には銀山経営の資金を得るために不可欠であった銀山貸付銀の融資にも関与していました。実際、熊谷家文書には、どの大名が銀山貸付銀を借りていたかを示す古文書がいくつか残されています。

したがって、熊谷家文書の内容を今後詳しく検討していけば、大森町の町人たちが銀山の経営にどのように関わっていたのかが、いろいろと分かっていくことになるでしょう。



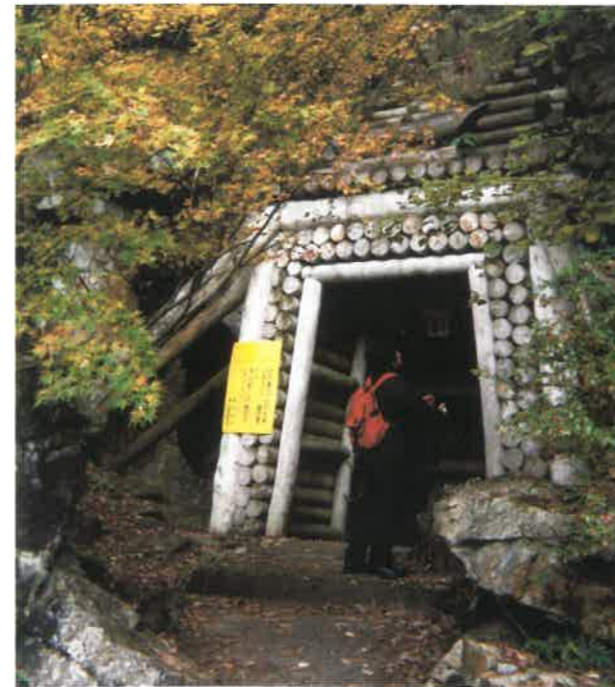
▲銀山貸付銀の貸付先と世話料の記録

(3) 科学調査

科学調査研究会の開催

世界遺産登録推進室 足立 克己

科学調査部会では、石見銀山に関する科学技術の解明を目的に、国内他地域の代表的な鉱山遺跡との鉱山技術の比較研究を主テーマにした、調査研究会を継続して実施しています。本年度は平成17年11月2日～4日に、山形県延沢銀山遺跡並びに福島県半田銀山遺跡において研究会を開催しました。



▲延沢銀山遺跡 銀鉱洞坑口

延沢銀山は、山形県尾花沢市大字銀山新畑地内を中心に、慶長年間（1596～1614）、山形最上家の家臣、野辺沢遠江守光昌が経営を開始したと伝えられる鉱山で、寛永・正保年間にかなりの産銀を得たと言われていますが、湧水や出水から寛文年間（1661～1673）には操業が放棄された鉱山です。操業期間が短かったため、江戸時代前半期の銀山開発の痕跡が明瞭に保存されていることから、昭和60年12月国史跡の指定を受けています。

研究会は、まず尾花沢市立芭蕉・清風歴史資料館において、同市教育委員会の大類誠補佐、ならびに梅津保一歴史文化専門員から、延沢銀山の沿革と概要を聞き、その後、延沢銀山の採掘の特徴などについて意見交換を行いました。また、翌日には、大類氏に加えて、仲野浩元文化庁主任文化財調査官の同行を得て、公開坑道「銀鉱洞」や山神社等の現地

調査を行いました。延沢銀山の採掘法の大きな特徴は、採掘前に岩盤を焼いたのち、水をかけて急速冷却し、ひび割れた岩盤を削り取っていく「焼き掘り」というやり方を行っていることです。現地調査の結果、緻密で珪長成分に富んだ細い脈石が木の根のように塊となっている鉱床の特徴が、手掘りよりも焼き掘りのほうに有利に働いたと考えられます。

もう一カ所の福島県伊達郡桑折町の半田銀山は、慶長3（1598）年、上杉景勝によって本格的に開発された鉱山で、延享4（1747）年に幕府直轄領、宝暦4（1754）年には御直山となった鉱山です。明治維新以降には樽混汞法や青化製錬法などの近代技術が導入されましたが、昭和25年に休山に至っています。半田銀山は石見銀山との関係も深く、石見代官から桑折代官に赴任したり、石見銀山の地役人が半田銀山に派遣されたことが記録として残っています。

半田銀山でも、昭和59年に開催された奥州半田銀山展を機会に資料収集や調査研究が行われており、その時の資料が桑折町陣屋に所在する重要文化財旧伊達郡役所に展示してあります。研究会はまず旧伊達郡役所の資料を調査し、翌日には、桑折町教育委員会井沼千秋主任主査と町文化財保護審議会委員半澤家治氏の案内で半田銀山遺跡の現地調査を実施しました。半田銀山の鉱床は、方解石と苦石灰を伴う含金石英脈ですが、母岩も含め、非常に脆弱な鉱床であることがわかりました。半田銀山の選鉱の特徴として、「大流し」、「長流し」「ねこ流し」と、水洗選鉱の回数が多い点が挙げられますが、その理由として、ここの鉱石が水洗いすることで簡単に砂粒化する、細かく砕けやすい石英脈であったことから、それによって金の選別を容易にすることができたためと推定されました。



▲半田銀山遺跡中敷坑

Banska Štiavnica市長補佐、小柄なDr.ミロン・プレズノシュチャーク氏は中年過ぎの快活で知的な人物でした。握手しながら「はるばる東洋から、この西洋の、私たちの小さな街に来てくれたことを感謝します。」

2004年11月下旬の午前、私は、石見銀山遺跡と類似鉱山との比較調査のため、スロバキア共和国 Banska Štiavnica市庁舎の講堂にいました。昨夜まで吹雪で凍り付いていた街は、くすんだような建物の壁も相俟って、寂れたように静かで人通りも殆どまばらでした。14世紀に建てられた小さな市庁舎自体も世界遺産の構成要素でした。

まず、私から(通訳を介して)市長補佐に私が調査に訪れた趣旨と石見銀山遺跡の説明をしたところ、「洋の東西に、このようによく似た、鉱山があるとは」と驚嘆の一言が返ってきました。そして返す刀で、1993年、この山間に孤立した小地域 Banska Štiavnicaの街と鉱山が世界遺産となった厳しいいきさつについて殆ど演説ともいえる口調で語り初めました。以下は、調査開始冒頭で、1時間以上にわたって同氏が語ったことを一部抜粋したものです。



◀鉱山発祥の山(右上)と麓の町並、遠望

「20世紀初めに、この地域において鉱業は成功していなかった。1918年、第一次大戦の敗戦とともにオーストリア=ハンガリー帝国(スロバキアはその一部だった)が崩壊。ここにあった鉱山アカデミー(大学)が外に移されてしまい、この町は高等教育機関を失ってしまった。

1980年代末以降、東欧革命と市場経済の流入に伴い、鉱業の将来性を失ってしまった。外国の個人が鉱業経営を試みたが鉱脈が深すぎて採算があわなかったことが判明した。

90年代初頭の閉山によって、3000人の雇用機会が失われた。さらにタバコ工場も倒産した。12,000人の人口を擁するこの市がどのように発展すべきか。まさに危機だった。1990年に就任した現市長はどうしようかと考えた。1978年には、すでにチェコスロ



◀廃墟となった工場跡(下)

バキア社会主義共和国政府によってこの市を救うための特別法令が出されてはいた。しかし、社会主義から市場経済の流れの中で状況は悪かった。産業の発展を期することは無理だった。

町を基礎から建て直す必要に迫られた。ガス・水道の整備も必要であった。そこで、市は2つの戦略を考えた。ひとつは国際的評価をうけること。ふたつめは、それゆえに国内的評価をうけることができる状態を創り出すこと。当市には世界遺産にする基礎があった。文化省・環境省・議会の指示で具体的な措置をとってくれ、1990年に国際的に評価される条件があるか調べ始めた。」

こうして1993年に Banska Štiavnicaは世界遺産になりました。

「登録で成功したと言うが、多くの人々は新しい一歩であると考えた。町の発展はこれからだ。まず、1918年に失った高等教育機関を取り戻し、80年ぶりに環境系の大学が設置された。世界遺産になったことでお金になったのではない。しかし、これは各方面への説明のための良い手段となった。市長とその協力者たちが、投資者に声をかけられるようになった。」

しかし、苦労は続いたようです。「世界遺産に登録されて後、資産の補修・再建が不十分だという人もあった。歴史原理主義の観点だけで、今日と将来の必要を無視して。また、世界遺産リストから抹消したい人もいた。そのせいで、市長が私に世界遺産から降りられるかどうか質問したことがあった。私は、『危機にさらされた遺産』について説明した。そして、抹消などは卑怯なまねだという結論に達した。」

「この町では、生活の中で鉱山が生きている。世界遺産の経験は私たちを鍛える手段。」

「市長の弁だが『ミロン。過去の鉱山労働者たちは、我々より難しい問題を抱えた。彼等は我々以上の手段を持たなかったのだ。』と。」

石見銀山協働会議 第3回全体会 開催

大田市 竹下 健

平成19年の世界遺産登録を目指す石見銀山遺跡の保全や活用の方策を官民協働で検討している「石見銀山協働会議」の第3回全体会を、プランナー及び一般聴講者約140名の参加のもと、11月13日 大田市のサンレディー大田において開催しました。

同会議は、昨年6月の発足以来、「保全」「発信」「受入」「活用」の4つの分科会に分かれ、それぞれ8回～9回の会合を重ね、今後取り組むべき課題の抽出とその解決策につき検討を行ってきたところです。



▲ポスターセッションの様子



▲世話人による中間発表

全体会では、これまでに抽出された約19項目の課題のうち、優先的に検討してきた8項目について「行動計画」としてまとめ、各分科会の世話人が中間発表するとともに、地域の将来像としての“私たちのめざす石見銀山の姿”(案)を発表しました。

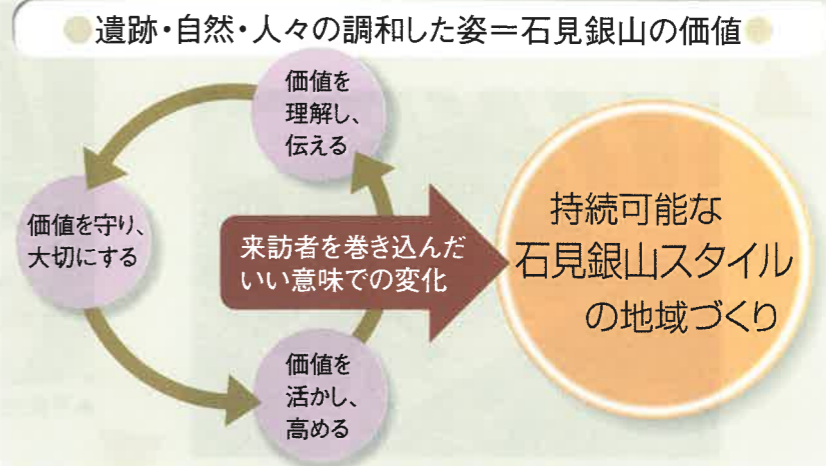
またこの日は、松江市の田和山遺跡の保全・活用に取り組んでいる民間団体「田和山サポートクラブ」の事務局長石橋博氏の事例報告を受けた後、同氏を助言者に各分科会の世話人らがパネリストとなつてのパネルディスカッションを行い、今後の石見銀山のあり方や同会議の進め方などについて活発な意見交換が行われました。

今後は、引き続き「行動計画」の残った項目の検討を進めながら、併せて具体的な「事業リスト」も作成し、3月12日(日)に予定している第4回全体会において発表する予定です。

各分科会「行動計画」 中間発表テーマ

- 「保全」分科会 ①「石見銀山ルールづくり」
- 「発信」分科会 ②「情報発信拠点の整備」
③「教育・普及活動」
- 「受入」分科会 ④「受入基盤の整備」
⑤「ガイド体制の充実整備」
- 「活用」分科会 ⑥「オリジナリティあふれる観光」
⑦「石見銀山ブランドの推進」
⑧「空家・遊休施設の活用」

“私たちのめざす石見銀山の姿” 概要図(案)



重要文化財熊谷家住宅

大田市 林 泰州

平成13年12月、工事に着手した熊谷家住宅（主屋・土蔵5棟）は、屋敷の景観が整った幕末から明治初年の姿に復原され、今年4月に開館を迎えます。

平成14年夏、主屋が仮設屋根に覆われて本格的に解体工事が始まり、翌15年夏に復原工事に入りました。復原に際しては家相図・古写真といった史料調査、遺構確認調査、古材の痕跡調査などの調査と考察を繰り返し行い、得られた成果に基づいた復原を行いました。並行している文献調査では現存する住宅が寛政12年（1800）の大火後、享和元年（1801）に建立され、衣装蔵が3階建てであったことがわかりました。



▲平成10年春 重要文化財指定記念



▲平成14年夏 仮設屋根に覆われた主屋



▲平成14年秋 主屋の解体状況

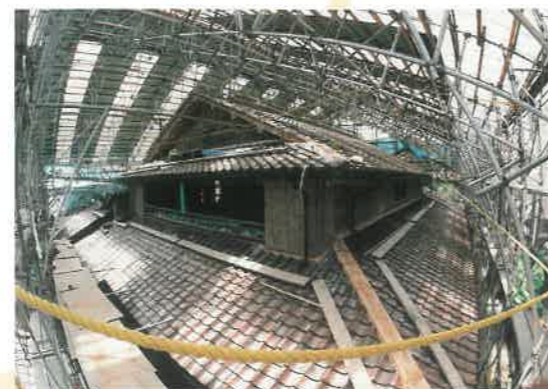
約4年の歳月と延べ約1万8千人が携わった保存修理工事は昨年8月に完了し、現在は展示に関する整備工事を主に行っています。保存修理工事に対する市民の皆さんの関心は高く、工事期間中に行いました現場公開には延べ約5千人の見学者を迎えました。

工事と並行して保存活用策の検討を行い、市民から寄せられた意見を参考に、くらしと歴史の「保存」・子どもたちに伝えていく「教育」・文化財に親しむ「活用」、これらを市民の手ですすめ、具体的な活用は官民による運営組織が中心になり、ボランティアによる活動を展開していくことなどを盛り込んだ活用方針を策定しました。

この中には工事期間中を活用の準備期間とし、活用の試行を行うことも盛り込まれており、昨年12月19日には学校教育における活用を進めるための実験を大森小学校の協力で行い、今年1月9日には大森町民の協力により一度にどれくらいの見学者を迎えることができるのか試験公開を行いました。



▲平成17年12月
修理が完了した主屋正面外観



▲平成16年夏 復原工事が進み、仮設屋根の撤去を待つ主屋

町並みを歩く 9 ~修理の現場から~

大森銀山地区（大田市 三谷岳史）

重元家主屋 明治初期以前（推定）

大森町宮ノ前にある町家です。向って左側の主屋と右側の土蔵が伝統的建造物ですが、その間を利用して建てられていた離れは、かつては納屋として使用されていました。

主屋は昭和50年頃に屋根替えが行なわれていますが、瓦釘の錆による膨張によりたびたび瓦が割れて雨漏りが発生していました。また昭和40年代には、大雨によって裏

山の土砂が崩れて納戸部屋に流入し、その時に床や外壁の修理が行なわれました。

修理は主屋の屋根替えを主とし、併せて建具の復原や外壁の補修をおこないました。離れは傷みが激しく、後背部の屋根が落ちる寸前だったため解体も検討されましたが、残すことにより主屋に合わせるよう修景を施しました。

土蔵は風雨による外壁の剥落が目立ちますが、簡単な屋根瓦の調整のみを行ないました。



〈修理前〉

かつて、敷地の前面にはなだらかな畑が続いていたが、平成15年3月に県道仁摩瑞穂線のバイパスが開通して景観が大きく変わった。



〈修理後〉

痕跡や聞き取りから、かつて玄関には片引きの大戸が、縁側には雨戸が入っていたことが分かった。また、外壁を覆っていたボードの下には土壁が残されており修理した。

温泉津地区（大田市 今田善寿）

旧波多野家 明治初期以前（推定）

建物の概要

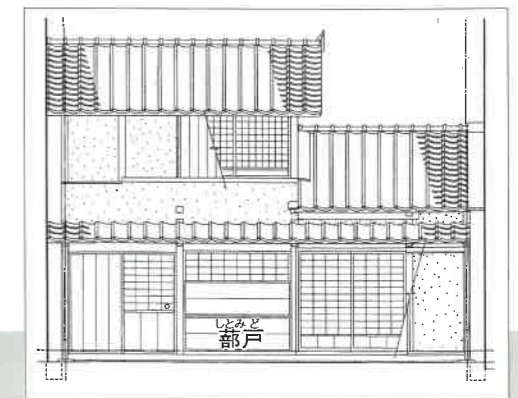
温泉津でも数少ない江戸時代に創建されたと推定される町家です。建物正面は柱を見せる真壁造りになっています。解体途中の調査では、正面中央の柱

の痕跡から、以前は“蔀戸”があったことが判明しました。また、正面1階の柱に腕木の痕跡が認められ、加えて、転用材が部分的に使用されていることも分かりました。

伝統的建造物の修理は可能な限り現在使われている梁や柱を残し、朽ちた部分だけの取替えにとどめます。



〈修理前〉



〈修理後〉（予定図）

石見銀山遺跡調査活動日誌抄

平成17年7月～平成17年12月

7/1	県市町) 第20回合同会議 (於: 松江市)	9/16	県市町) 第8回石見銀山遺跡アクションプログラムプロジェクト会議 (於: 出雲市)
7/3	第2回石見銀山協働会議全体会 (於: 大田商工会館 110名参加)	9/22	県市) 石見銀山遺跡生物調査さんべ自然館協議 (於: さんべ自然館)
7/4	県市) 文化庁記念物課本中主任調査官推薦書協議 (於: 文化庁)	10/1	市) 大田市・温泉津町・仁摩町が市町合併し 新「大田市」発足 石見銀山課が総合政策部に 所管替え
7/6	県町) 温泉津町日村試掘調査現地協議 (於: 温泉津町日村)	10/5	県市) 第9回石見銀山遺跡アクションプログラム プロジェクト会議 (於: 出雲市)
7/6	県市町) 第5回石見銀山遺跡アクションプログラム プロジェクト会議 (於: 松江市)	10/9～15	県) 第17回全国生涯学習フェスティバル出展 (於: 鳥取県民体育館)
7/6	市) 大森銀山地区伝建審議会 (於: 町並み交流センター)	10/12	県市) 文化庁記念物課磯村主任調査官史跡管理 団体指定申請協議 (於: 文化庁)
7/6～7	市) 伝建審議会委員細見啓三氏重伝建大森銀山地区 現地指導 (於: 大森町熊谷家)	10/14～16	県市) 恵珠寺墓地石造物調査 (温泉津)
7/7	県) 仁摩温泉津道路五丁遺跡群発掘調査松江国道 事務所協議 (於: 松江国道事務所)	10/15	市) 石見銀山ブルーーツーリズムのモニターツアー (於: 仁摩漁港・鞆ヶ浦・温泉津漁港 20名参加)
7/11～12	市) 文化庁建造物課中技官熊谷家現地指導 (於: 熊谷家)	10/18	県) 併任者及び関係次長会議WG合同会議 (於: 松江市)
7/13	県市町) 科学調査部会 (於: 銀山調査事務所)	10/25	県) 関係次長会議 (於: 松江市)
7/14	H17/1月申請石見銀山遺跡追加指定官報告示 (銀山柵内・沖泊・鞆ヶ浦・羅漢寺五百羅漢)	11/1	県市) 第10回石見銀山遺跡アクションプログラム プロジェクト会議 (於: 出雲市)
7/15	国) 文化審議会文化部会において史跡石見銀山遺跡 の世界遺産登録推薦書を提出することを了承	11/1	県市) 発掘調査現地指導会 (於: 大森町)
7/15	県市町) 発掘調査部会 (於: 銀山調査事務所)	11/2～4	県市) 科学調査研究会 (於: 山形県延沢銀山遺跡・福島県半田銀山遺跡)
7/20	市) 藤間亨氏熊谷家住宅庭園整備現地指導	11/3	県市) 山陰史跡探索バスツアー (於: 石見銀山遺跡 120名参加)
7/21～22	県市町) 県議会文教厚生委員会現地視察 (於: 大森町・温泉津町)	11/9	県市) 第11回石見銀山遺跡アクションプログラム プロジェクト会議 (於: 出雲市)
7/26	県市町) 第6回石見銀山遺跡アクションプログラム プロジェクト会議 (於: 松江市)	11/10～12	国) 文化審議会文化財分科会委員石見銀山遺跡 視察
7/28	温泉津) 温泉津地区伝建審議会 (於: 温泉津町公民館)	11/12～13	全国鑑絵サミットインしまね(於: 大田市あすてらす)
7/28～29	温泉津) 齋藤英俊氏重伝建温泉津地区現地指導	11/13	県市) 第3回石見銀山協働会議全体会 (於: サンレディ大田 140名参加)
7/29	市) 伝建大森銀山地区保存計画を改正	11/21～24	市) 小泉和子氏熊谷家家財調査現地指導 (於: 水上収蔵庫)
8/1	市町) 石見銀山景観保全条例を施行	11/23	市) 発掘調査現地見学会 (於: 釜屋間歩周辺 30名参加)
8/5	県市町) 石見銀山遺跡調査整備委員会 (於: 松江市サンラポーむらくも)	11/27～29	市) 齋藤英俊氏現地指導 (於: 温泉津・大森銀山重伝建地区)
8/7	市) 熊谷家保存修理工事現場公開	12/2	県市) 石造物調査部会 (於: 温泉津コミュニティセンター)
8/8～12	広域) 2005石見銀山講座の開催 (於: 大森町ほか 35名参加)	12/10	市) 大森町地元説明会 (於: 町並み交流センター 35名参加)
8/9～10	県市町) 韓国イコモス執行委員黄琪源氏現地視察 (大森町・温泉津町)	12/13	県市) 第12回石見銀山遺跡アクションプログラム プロジェクト会議 (於: 松江市)
8/10～12	県市) 文化庁記念物課市原調査官現地視察 (於: 石見銀山遺跡)	12/13	県市) 第1回石見銀山遺跡関連緊急課題対応策 検討会議 (於: 松江市)
8/11	市) 大森町地元説明会 (於: 町並み交流センター)	12/13	県市) 科学調査部会 (於: 銀山調査事務所)
8/16～19	市) 小泉和子氏熊谷家家財調査現地指導 (於: 水上収蔵庫)	12/16	市) 大田市石見銀山プロジェクト推進本部発足
8/18	平成17年度サイン整備等報告会 (於: 町並み交流センター)	12/20	市) 史跡石見銀山遺跡管理団体指定申請書 文化庁提出
8/22～25	県) 熊谷家文書調査(於: 大田市立図書館 文献調査団)	12/24	県市) 日本イコモス国内委員会事務局協議 (於: 日本イコモス事務所)
8/23	県市町) 第7回石見銀山遺跡アクションプログラム プロジェクト会議 (於: 出雲市)	12/25～28	県) 熊谷家文書調査 (於: 大田市立図書館 文献調査団)
8/26	国県市町) 鳥根県道路交通環境安全推進連絡会議 (石見銀山案内標識) ワーキング会議		
9/6～7	県市) 大規模遺跡調査連絡協議会 (於: 米子市)		
9/15	国) 関係省庁間協議において政府として正式に 石見銀山遺跡を世界遺産に推薦することを了承		